

平成19年第11回公開文化学術講演会

石川って、スゴイ！

テレビディレクターが出会った人と町

蔵 宏太郎

皆さん、始めます。

…残っている方にはとても嬉しい企画だと思います。

これから経営学会の、ここに書いてありますが、公開文化学術講義会を始めます。星稜女子短大には経営学会ってのがあって、こういう論文集を発行したり、今日のようなお話を聞いたり、それから2年生の卒業論文集を発行する、そういう活動をしている経営学会というのがあるんです。それと皆さんが毎年二千円ずつ会費を納めている、そのためにそのお金で今日の講師の方をお呼びすることができる、そういう会なんですね。この会の会長は、千原先生なんですが、今日はお休みされていらっしゃると思いますので、早速始めたいと思います。今日は蔵宏太郎さんという方のお話を伺うのですが、ここで辻先生に蔵さんをご紹介いただいた後、蔵さんの講演会に入っていきたいと思います。楽しい時間だと思いますので聞いてください。先生お願いします。

(金沢望郷歌が流れる)

この松原健之の金沢望郷歌、これ何枚売れたか知ってる人います？何枚売れたでしょうか？10万枚売れてるらしいです。地方発のご当地ソングとしては10万枚といってもかなり異例のことなんですね。冒頭にこの歌流したのは、今日の話してくださる蔵さんがこの歌をプロデュースした方なんです。このヒット曲の仕掛け人なんですね、蔵さんが。勤め先はテレビ金沢で、入社してから最初報道記者をやって、その後番組制作に関わってらっしゃいます。皆さんお馴染みの色んな番組も出たり、作ったりしてる方ですね。例えばズームイン朝とか、24時間テレビとか、あるいはJリーグの中継とか、そういうのを経験されています。地元でお馴染みのじゃんけんぽんという夕方の番組も総合演出されている、総責任者みたいな人ですね。あと五木寛之、有名な作家五木寛之っていますが、新金沢百景とか新金沢小景という、それがまとめられた本まで出てますが、これも何万部かもう出てる、結構売れてる本なんですけれども、この番組を担当されている方ですね。今年の夏、ある大手の新聞社が、こういうアンケートをとったんですね、全国の人に。美しい町並みと聞いて思い浮かべる都市は何処ですか？1位はやっぱり京都なんです。金沢は何位に入っていたと思います？4位です。よくテレビとか大手の新聞社、例えば住んでみたい町は何処ですかとか、ファッショナブルな町は何処だと思いますか、というアンケートをとると、だいがい金沢はベスト10以内に入りますね。簡単に言うと金沢はそれだけ観光地としてのブランドイメージが非常に高い町なんです。この間の冬、東京に出張に行った時も、たまたま大手の旅行代理店の前に沢山海外の旅行のパンフレットも含めて、100ほどのパンフレットある前で、ちょうど3人ほど女子大生ぐらいの子が何部も色んなパンフ

レットために迷ってたんですね。何処選ぶんだろうなと思ってなんとなくちょっと見てたら、だいぶん迷った挙句に金沢のパンフレットを取って行ったんですね。春休みの旅行かなんかだったんだと思うんですけど。それを見て嬉しくなったんですけど。しかし、それほど観光地としてのブランドイメージが全国的に高い町なんですけど、蔵さんによると、金沢および金沢含めた石川県の本当の面白さというのは観光客にはとても分からない、本当に暮らしてみないとわからないとおっしゃるんですね。五木さんとこの金沢のいろんなところを探訪したこの番組制作を通じて、探求すればするほど石川県は本当に興味深いところだなと思いが強くなってらっしゃってました。この春来県された小泉前首相も石川県のいろんなところを回って、本当に日本にはまだ素晴らしい観光素材がいっぱい眠っているんだなとつくづく実感したとインタビューで答えてましたね。そういうことで、今日はそういった番組制作を通して発見した、皆さんの知らない石川県の魅力を、今から蔵さんに語って頂きます。では蔵さん、よろしくお願いします。

初めまして、テレビ金沢の蔵と申します。こんにちは。元気がいいですね。2時間就職のガイダンスを受けた後だということで、僕もちょっと色々話すことを考えてきたのですが、気楽に聞いてください。たぶんこれを覚えたからといってお金儲けができるとか、そんな話は全く無いので。ただちょっと友達と話す時に、あるいは特に金沢のことに興味ある人とか、金沢に観光に来た県外の人とか、そういう人に話す時にちょっと参考になることがあるかも知れないので、そんな話だと思って聞いて下さい。

まず、辻先生から非常に過分なプロフィールをいただきました。で、僕のいまの担当というのは、番組のプロデューサーとディレクターという二つの役割をもっています。テレビのプロデューサーとかディレクターというのは、言葉としては聞いたことがあると思うのですが、プロデューサーとディレクターがどう違うかってあんまり分からないですよ。僕もよくわかんないんですよ。なぜかという、勝手に決めてるんです。そのプロデューサーとディレクターっていう役割を、番組によって全然プロデューサーとディレクターの役割がまず違うので、じゃあこの番組はこうするかみたいな。ここからここまでプロデューサーがやって、ここからここまでディレクターに任せたぞと、そんなような、ちょっとアバウトな決め方をしているので、よく分かりませんが、とりあえず、ディレクターという人がいて、この人は、番組の現場の責任者という形、部活動でいうとキャプテンにあたる人、プロデューサーは監督みたいな感じだと思います。家をたてるときに、建築家がプロデューサーで、大工の棟梁がディレクターとよく言われますが、だいたいそんなことだと思ってください。で、ディレクターは現場というところで何をするか、たとえばカメラマンにあんな画をとってくれとか、アナウンサーに台本を渡してこんな表情で話してくれとか、ここで説明してくれとか、というふうに。例えば音声マンっていう人がいまして、音声マンにここはしっかりと話しながらピアノのやさしい曲を流してくれとか。そ

というようなことですね。その前にプロデューサーという人がいて、何にもない状況からこんな番組を作りましょうっていう話をプロデューサーがする。っていうのが、テレビのスタッフの内訳ですね。プロデューサーとディレクターってのはあんまり境目がなかったりしますし、実際のところはPDといってプロデューサーとディレクターと一緒にやったりして、だいたいそんなようなことだと思ってください。で、今ですね、今日の新聞を持ってきてテレビ欄を見るんですが、だいたいどれくらい地方局が製作しているかという、テレビ金沢がいま一番地方局の中では、自社製作率ってのが多くて、だいたい10%ちょっとありますね。だから20時間番組をしているなら2時間、そのくらいの割合をテレビ金沢が作っている。このシステムを、まあ文化講座なんですけど、あんまりこだわらずに裏話とかうちわの話をさせていただくと、テレビ金沢は日本テレビ系列の地方局です。日本テレビがありまして、テレビ金沢は子会社ではなくて、ひとつの会社です。ここが放送の提携を結んでいるので、日本テレビで放送する番組をテレビ金沢で見られる。そのかわり、日本テレビがコマーシャルを流すときは、テレビ金沢にも流れる。たとえば、ビールのCMを作ります、といったときに、日本テレビのほうから、ビールが麒麟だとして、麒麟の方に、テレビ金沢にもCMが流れますよってとこでテレビ金沢ってのをアピールをできると。そういう関係なんですね。資本はもっているが子会社ではないということですね。で、ここから日本テレビが番組表を送ってきて、朝は例えば「ズームイン!! スーパー」やるとか、その後はワイド番組やるとか、いろいろ送ってくるなかで、ここは自由に使っていいですよというところや、どっちでもいいですよとか、あるいはぜひこの番組をテレビ金沢のほうで放送したいなど、思ったりします、そしたらその部分を差し替えてテレビ金沢の放送をするっていうシステムですね。ですから日本テレビで作った番組は常にテレビ金沢に送られてきてて、その間にテレビ金沢の番組をはめこんでいるんです。コマーシャルにしても絶対東京で流れないようなCMありますよね。地元のパチンコにしても、あれはローカルCMっていうんですけど、そこにローカルCMを流すというような編成をしています。これを組むのは番組編成っていうところで、いまテレビ金沢は夕方5時前から「びーびーみつばち」って番組2時間をやっています。でもうひとつこの最近の番組を見て非常に感じる傾向ってのがあります。テレビ局で番組を制作する部署ってのは大きく分けて2つあります。1つは報道のニュースですね、ニュース番組。もうひとつは制作番組。ちょっと言葉分かりにくいと思うのですが、大きく分けるとニュースと制作という2つの大きな部署があります。報道は記者がいっぱいいますけど、ぼくはここで5年間事件などの記者をしました。制作っていうのは、スポーツとか情報番組とか食べ物とかVTRあるいはスタジオ収録でそのタレントさんにしゃべってもらっているトーク番組、そういうのは全部制作番組っていいです。これは大きく違います。見た目でいうとニュースの記者はみんなネクタイしめて、いかつい顔しててあんまり笑いません。制作の人は、ネクタイを締めずにフロアを這いずり回るようなことができるような服装でいいと思う。なんと

なくそういう分け方があります。最近のテレビの傾向っていうのは、例えばテレビ金沢の番組でみてみますと、最初にズームインスーパーってのがありますが、これはニュースと制作が一緒になって作っています。制作って人が番組を作って、そこにニュースのネタを入れていく、っていうのが「ズームイン!!スーパー」ですね。そのあとの「スッキリ」ってのも、ほとんど制作ですが、そこに5分間だけニュースを入れる。このあとの時間帯もずっとそうなんです。『思いっきりテレビ』はたぶん制作だけで作ってます。ワンコーナーだけありますが。ザ・ワイド、これもほとんどニュースと制作が一緒ですね。だから、いまそのニュースが制作番組になりつつあり、制作もニュースの情報を求めているというのがいまの主流です。ちょっと堅い話になってきました。ちょっとやわらかめにいきますかね。僕のやってきたことでいいますと、最初5年間事件担当の記者をしました。その後制作にきて、制作ばかり10年間やってるんですけど、最初は堅町で若者向けの番組を1年くらい作って、そのあと「ズームイン!!スーパー」、あの当時は「ズームイン!!朝」といいました。その番組の金沢からの情報を作っていました。で、24時間テレビとかJリーグとか高校サッカーとか色々作って、その後に今日ご紹介しようと思ってた、「新金沢小景」という番組を作ったんですね。制作番組の場合は、番組のコンセプトってのが非常に大事なんです。ニュース番組というのは、どれだけ面白いネタが拾えるか、誰よりどれだけ早く正確なネタが拾えるかってなことなんですけど、制作番組ってのは、全く何にもないところから何かしようと思えるわけなんです。誰かに何か歌わせる番組にするのか、今売り出し中のお笑いを使って何かやるのか、何でもありだけど何にもないみたいな、何をしたいかが非常に大事なんです。で、僕が最初に、僕が作った新金沢小景っていう番組は、ちょっと今日紹介する内容と非常に近いんですけども、金沢ってのは非常に観光都市として有名だけれども、じゃあ本当のその金沢ってのはどんな町なのかってのを、もう1回見ようという様なコンセプトの番組でした。で、この番組を作るにあたってその案内人として一番ふさわしいのは誰かっていうので探したところで、作家の五木寛之さんという人にたどり着いたわけですね。で、五木寛之さんって分かりますか、五木ひろしじゃないですよ。では、番組のタイトルを。

(新金沢小景のタイトルが流れる)

はい、この方です。顔は見たことがあると思いますが、何か本の背表紙に五木寛之って書いてあるの見たことあると思いますが、作家さんです。小説家ですね。最近のエッセイとか仏教に関する本とかをよく書いてますが、文壇のトップです。今74歳かな。お年なんですけど、物凄い精力的に仕事をしてて、こういう講演会、500人とか、1000人とか集まる講演会を年に100回くらいやるって言うてましたね。年に100回っていうと、たぶん3日に1回くらい講演やってて、話すのも非常に上手いし、コンセプトを持って話される方なんだと思います。その他にも、全国放送ですけど、テレビ朝日の「百寺巡礼」っていうお寺

をまわる企画とか、来年の頭にはNHKで仏教を巡る旅を新春スペシャルでやるそうで、去年の紅白歌合戦では審査員なんかもやってましたけど、作家なんですけど色々出ていて物凄い忙しい方なんです。その人が何故テレビ金沢の仕事をしたかっていうと、金沢に対して大変思い入れが深い人なんですね。五木さんのプロフィールをちょっと話すと、ご両親が福岡の方なんです。その後戦争で朝鮮半島に移ってそこに住んで、そこで戦争を体験して、日本が敗戦、負けるんですけど、命からがら抜け出して、福岡、九州に戻ってきて、早稲田大学に入って、ロシア文学を勉強して、物凄い貧困な生活をして、神社とかお寺で寝泊りしたりもして、そこで一人の女性と出会いますね。その女性が金沢の昔の市長だった岡良一さんという人の娘さんと出会って、その人と結婚を決めて金沢にくるんです。物凄い大変な時期で忙しい毎日からのがれてちょっと体を休めようとしたのが金沢で、ここで自分がやりたいと思っていた本の執筆活動を始めてですね、そこで書いた本がたまたま、と本人は言ってますけど、新人賞とか直木賞とか取って、もう一気に全国的に有名な作家になりました、そこから東京にもう1回行って作家として活動始める。五木さん曰く、金沢は自分の作家としての故郷だってこと言って、だから単なるローカル局で案内人として出ていただいてるということです。

まず最初にこの番組を作りたいと思ったのは、僕は生まれは金沢で、高校がその桜丘高校です。そこから大学で東京に行って、就職で戻ってきたんですけど、大学の友達が金沢案内してって金沢に来ててもですね、どこも案内することができなとか、しても何か言えないんですよ。皆さんそんな経験ないですか？県外からの友達が金沢来たいとか言ってですね、美味しいしきれいな町だから来な来なとか言って、とりあえず来てもらうんですけど、兼六園行って、きれいなお庭でしょうみたいな、金沢城行って、これ最近建ったんだよみたいな、それ以上言えない。じゃあ魚でも食うかみたいな、それで終わって、金沢って本当にいい町かどうか全然分からなかったんですね。そんなような事がずっとなんとなく頭の中にあって、調べてみるとですね、これが結構やっぱり奥深い町なんですよ。例えばここに兼六園と書いてあるんですが、兼六園なんかもういっぱい見るところはあるんですが、例えばちょっと見てください。

(新金沢小景「兼六公園の頃」の映像が流れる)

「藩主の庭園も、明治に開放され、店が建ち並び、その後廃屋であふれる時代を経た」という内容。

「兼六公園の時代」というタイトルですが、そういえば県外のおじさんとかがですね、兼六公園連れてけとか言うんで、違う違う違う兼六園だよって言ってたんですけど、兼六公園と言われていた時代が実際にあったんですね。何となく行ってですね、兼六園入って、こういう風情を昔の人は楽しんでたんだなと勝手に思って、これが百万石の文化だと

思っ て 見 て ま し た け ど、 そ う な る 前 に い ろ ん な 紆 余 曲 折 が あ っ た っ て い う こ と で す ね。 勿 論、 兼 六 園 に ま つ わ る 話 こ れ だ け じ ゃ な い で す よ。 も う 色 々 た く さ ん あ る と 思 う ん で す が、 例 え ば そ の 中 の 一 つ と し て、 こ う い う こ と が あ る ん で す。 ち ょ っ と 兼 六 園 で 何 か や ろ う と 思 っ た と き に、 例 え ば 回 遊 式 庭 園 と い い ま す よ ね。 見 て ま わ っ て、 自 分 で ス ト ー リー が 出 来 て い く お 庭 と い う か、 そ う い う 風 な こ と と か、 こ れ ば あ る と こ ろ か ら 持 っ て き た 石 だ と か で す ね、 こ れ は ど の 軍 人 に 縁 の あ る お 店 だ と か、 何 か 色 々 あ り ま す が、 ち ょ っ と 調 べ て い っ て で す ね、

明 治 の 頃 に そ う い う 事 が あ っ た と は 全 然 知 ら な く て、 今 言 っ て た よ う に で す ね、 ず っ と 前 田 家 の お 庭 だ っ た り 退 避 場 だ っ た り し た ん で す け ど も、 そ の 後 に 明 治 な っ て、 実 は 金 沢 と い う 町 が で す ね、 一 回 危 機 に さ ら さ れ る 時 期 が あ る ん で す ね。 最 後 ま で 日 本 の 政 府 に 対 抗 し て、 明 治 維 新 に 反 発 し た グ ルー プ っ て の が あ り ま し て、 だ か ら 日 本 政 府、 明 治 政 府 に は 目 を 付 け ら れ て て、 あ こ は 保 守 的 な と こ ろ だ と か 言 わ れ て で す ね、 明 治 に 入 る と 金 沢 が 危 機 を 迎 え る ん で す よ。 そ れ と 時 を 同 じ く し て、 こ う い う 施 設 が 結 構 荒 ら さ れ た り す る ん で す ね。 石 川 県、 当 時 は 加 賀 藩 の 藩 庁 と か 言 っ た と 思 う ん で す が、 そ う い う 所 が 管 理 し て て、 お 金 が な い も ん だ か ら、 一 般 開 放 し ま す と、 こ こ に 茶 店 を 作 っ て い い か ら、 土 地 代 よ こ せ と か、 借 り 代 こ れ だ け だ と か、 そ う す る と わ 一 つ と み ん な 手 を 挙 げ ち ゃ っ て、 最 終 的 に は 50 軒 ぐ ら い が、 ち ょ っ と 想 像 で き ま せ ん け ど あ そ こ に 櫛 の 歯 の 様 に 建 っ た と か 書 か れ て ま し た け ど、 わ 一 つ と 霞 ヶ 池 の ほ と り に 茶 店 と か 団 子 屋 と か 洋 食 屋 さ ん と か 建 ち 並 ぶ ん で す っ て。 そ の 後 すぐ、 戦 時 中 の 混 乱 で、 茶 店 が ど ん ど ん ど ん ど ん 潰 れ て い く と そ れ が 廃 墟 に な り ま す よ ね。 そ こ に 今 で 言 う ホ ー ム レ ス み た い な 人 が 住 み 着 い て で す ね、 と ん で も な い 荒 れ 果 て た 状 態 に な っ て た と い う、 そ ん な 時 代 が あ っ た ん だ と い う こ と で す。

兼 六 園 の 隣 に 金 沢 城 公 園 っ て の が あ り ま す が、 こ こ も ぱ っ と 見 て で す ね、 ど う 説 明 し て い い の か、 例 え ば 入 っ た そ の 石 川 門 の 中 が、 あ れ 正 方 形 で は な く て ち ょ っ と 菱 形 に な っ て る ん で す が、 そ う い う 話 と か、 入 る と き に 石 垣 が 雑 だ っ た の が、 中 入 っ た ら す ぐ き れ い な 石 垣 に な っ て る の は、 建 て ら れ た 時 代 に よ っ て 違 う と か、 色 々 あ る ん で す け れ ど も、 実 は 金 沢 城 と い う と こ ろ は 非 常 に 金 沢 の 歴 史 を 象 徴 し て い る と い う 場 所 で、 勿 論 皆 さ ん 知 っ て る 前 田 家 の 居 城 だ っ た の が 江 戸 時 代 で す け ど も、 そ の 前 は 尾 山 御 坊 っ て い う 浄 土 真 宗 の 総 本 山 み た い な と こ ろ が あ っ た 場 所 な ん で す ね。 そ の 後 に 柴 田 勝 家 と か 加 賀 藩 が あ そ こ に、 浄 土 真 宗 を 排 除 し て 城 を 建 て て、 そ の 後 明 治 に な っ た ら、 今 度 は 九 師 団 と い う 軍 隊 の 頭 脳 部 で す ね 心 臓 部 み た い も の が 置 か れ て、 金 沢 は 軍 都 に な り ま す。 そ の 後 金 沢 大 学 が そ こ に 入 っ て、 初 め て 一 般 公 開 さ れ る と い う よ う な 歴 史 が あ る ん で す ね。 だ か ら 金 沢 城 を こ う 歩 い て で す ね、 芝 生 も き れ い だ し、 石 垣 も き れ い だ し、 な ま こ 堀 み た い の も き れ い で す け ど、 ち ょ っ と こ う 横 を 見 る と 何 か 煉 瓦 造 り の 変 な ト ン ネ ル が あ っ た り で す ね、 何 か 明 治 時 代 っ ぽ い 洋 館 の ち っ ち ゃ い 建 物 あ っ た り と か い う の は そ う い う 複 雑 な 歴 史 の 流 れ な ん で す ね。

そんなものを一つ一つ調べていったのがこの番組ですね。

もう一つ何か番組を…金沢駅周辺のことをやりました。ちょうど金沢駅から東金沢駅にかけてのお話だったので、ちょっとこれをご覧ください。

(新金沢小景「ハス田、北へ」の映像が流れる)

「金沢駅周辺はかつて広大なハス田。今は河北潟で盛んに作られている」という内容。

はい、蓮根畑でした。金沢駅の周辺は昔蓮根畑だったんですね。ほかにも金沢駅が市の中心部にない理由は、ちょうど戦時中に建てられたときに、軍事的な要素が非常に強かったんですね、なんか3つくらいルートの候補があったそうですね、いまの片町香林坊の通るところに金沢駅を作ろうか、あるいはもうちょっと山側の寺町とかあの辺に金沢駅を作ろうか、で、もうちょっと離れた当時全くなんにもないそこに金沢駅を作ろうか。いろいろ案はあったらしいですが、結局その例えば軍隊の凱旋なんとか式とかですね、そういう兵隊さんが集まってやるような儀式とかやるようなことも考えて、ちょっと中心部から離れたところに金沢駅を作ったということらしいです。ちょっと離れているから不便ですけどね、でも全国には町の中心に駅がある町もありますが、繁華街から離れた駅がある都市もありますけど、たぶん結構いろいろ複雑な歴史がその町にもあるんだと思います。

では、どうやってこういう構成を決めて、どういうふうに台本を書いて、五木さんに何を語ってもらって、というのがさっきでいうプロデューサーではなく現場のディレクターの仕事なんですけども、それをどうやって作るかというのをちょっとだけご説明できたらと思ひまして、ちょっとそのために1本見てください。

(新金沢小景「どしょうが香る夏」の映像が流れる)

金沢の食べ物を扱った企画です。ドジョウの蒲焼を食べたことがありますか。懐かしい味だと思うんですけど。ドジョウの蒲焼を全国でも食べることがないらしくて、僕も子供のころ親に食べさせてもらったので、なんとなく懐かしい味なんですけど、なんで金沢にドジョウの蒲焼があるのかという話です。

(映像が流れる)

これもいろいろ説があるので、一言では言えませんが、金沢のドジョウが卯辰山に幽閉されたキリスト教徒だ、ということになりますね。で、まずこの企画を作るときに、ドジョウがなんであるのかってところから調べるんですよ、食べたろうなぎのほうがいいと思うんですね、食べ物としては、なんでドジョウがあるのかって調べたら、こういうことが分かってきて、それを伝えたのがキリスト教徒だという話があって、キリスト教徒って何って話でちょっと調べると、江戸から明治に移ったときに、長崎で隠れキリシタンが、私は実はキリスト教徒でしたって告白するわけですけど、それが政府に認められなくて、

全国各地に送られて幽閉されて、改宗しろと、キリスト教やめろとことを言われるんですね。幽閉先で一番多かったのが金沢だってことがわかって、幽閉されたのが卯辰山の奥なんです。長崎から船で、冬です。船の底に箱詰めされて、一方は大阪、瀬戸内海を渡って、京都から歩いて山越えて、加賀入って金沢に来たそうですし、もう一つは能登半島からずっとまわってきたそうですし、そういう人たちが500人から600人卯辰山に幽閉されたんですが、そういう過去の歴史があったってことがわかったんですね。じゃあその企画どうしようかなって思ってたときに、例えばさっきのドジョウの蒲焼屋さんの、つけてたタレとか、普通の番組ならこのタレは秘伝のたれで、どんな味がして、昔から一切作り変えてませんとかいって、あとは五木さんが食べておいしいといった、そんなような番組になると思うんですが、そうじゃなくてドジョウがある金沢の風景ってどんなことなのか、ってのをコンセプトにした番組なのでこういうつくりになりました。こういう細かい中身なんです、ディレクターとして何をしたかという、まず、

(映像が流れる)

ここのカットですね。もちろんおじちゃんの作ってるカットなんですけど、普通にいくとだいたい、このカット(調理場の広い画)の次はこういうカット(ドジョウをさばく手元)がくるんです、でも見たくないでしょ。泡だしながら、あのドジョウがいわゆるまな板の上のドジョウなわけですよ。びーっと切られて、音もブチブチって小骨が切れる音がするんですが、そういうグロテスクなところを出したくないし、しかもおばちゃんいまだに80近くていまだにドジョウ裁けないって言ってましたから、やっぱりこれ気持ち悪いんですこれ。だからこのカットはこの1枚だけにしましたね。

(映像が流れる)

で、このおばちゃんの話を知ったかったですよ。夏の日取材したんですけど、このおばちゃんのおでこが主人が載いてらして、ところが夏なので、日差しが強くて、使い捨てカメラで撮ると、後ろ真っ黒になるでしょ、だからこのカットをとるために、実はこの辺に照明3台入れてるんですよ。3台くらい入れてもこの程度なんですけど、このおじちゃんのこれ(調理風景)がやっと見えると、そのために照明を仕込みます。

さっき言ったキリスト教の悲劇みたいな物語がありますね。キリスト教の悲劇をあらわすときに、何を撮ろうかなと思うんですね、例えば当時の写真とかあったんですけど、そういうのをリアルに出すのではなくて、山奥にあるキリスト教の巡礼者碑、亡くなった隠れキリシタンたちを弔うところなんですけど、これ本当に卯辰山の山の中にたってて、この一枚のカットだけでさびしい様子をだすために、山のカットから奥の木に行くズームインの早さとか、それをモニター画面で何回も何回もみて、このコメントをカメラマンの横でささやきながらですね、これくらいの早さこれくらいやなほどカットを取ると、これく

らの早さになる。

(映像が流れる)

ここからピークです。番組のピーク、山場。これは、あんまりこうカットを重ねて、リズム感のある企画にはしたくなかった。で、なんとなく、そのタイトルがドジョウが香るまちだっていうので、なんとなく切ないドジョウの煙の香りがただよってました。それを町の風景であらわした画がこれで、どういうことかという、照明はつけたままなんですけど、これ実は前の家の駐車場の車をどかしてもらって、駐車場の奥のほうにカメラを1台ずっと回しっぱなしにして、この角度を撮れた。例えば、お手軽に絵を構成するときは、こんな絵があって、おじちゃんの顔があって、蒲焼のこんなんがあって、それを買ってる人、3枚くらいをつないでもらうと、なんとなく15秒つながるんですけど、今回町のドジョウの香りみたいなことがテーマだったので、長めのカットでこういうことになった。(映像が流れる)

いいでしょ。気に入ってるんですけど。伝わらなかったらしょうがないんですけど、ちょっと伝わったらいいですね。これが金沢の一つの風景なんですよ。兼六園もそうなんですけど、こういう街角もこういう風景だということを現したいために、こういうカットをつなぎました。

で、新金沢小景という番組は、まだ実は続いています。今日も夕方6時前に1本やる。これでだいたい200本近く作ったんですけど、やっぱり探せば探すだけ金沢ってのは物語のある町で、さっきのドジョウ屋さんも美味しいかまずいかの話以上、普通はあんまり感じないんですけど、実はそこにキリスト教の歴史があったという、ちょっと町も面白くなるじゃないですか。で、町歩きの楽しさは物語だと書いてありますけど、そういうことだと思っただけですね。例えばディズニーランドが行って何が楽しいって、別にビッグサンダーマウンテンの上がったり下がったりするのが楽しいじゃなくて、あそこでアメリカの中西部みたいな赤い岩のところを駆け抜けていく、そういうのがいいわけでしょ。何もなくてただのジェットコースターじゃなくて、ビッグサンダーだから面白いんです。物語が町を面白くするというコンセプトで、新金沢小景を作りました。なぜ金沢にそういう物語が沢山あるかと考えると、単に百万石の歴史だけでなく、その前に加賀藩の前田家と相反する浄土真宗という宗教的思想があるし、そこから明治に移りきれなかった歴史ってのもあるし、そういうのが重層的に重なりあっているのが金沢で、ちょっと掘ると別のものが出てきて、もうちょっと掘るとまた別のものが出てきて、っていうようなことが金沢の町の中にあるんだということをこの番組を通して感じました。

この番組から、さっき辻先生が紹介してくれた、「金沢望郷歌」という企画が生まれました。五木寛之先生が歌詞を書いて、金沢の歌を作ったんだけどどうかなあと見せてくれる

ので、なんかやりましょうというような話で、最初はほんとにテレビ金沢レーベルからインディーズで出そうとかですね、いろいろ考えてたんですが、CD発売をせずに「じゃんけんぽん」という番組の中で、松原健之君って子を発掘してきて、本当に街角で109の前でもですね(音楽が流れる)テレビで毎週毎週出したんですね。金沢望郷歌っていう歌を毎週毎週出して、いろんなところでお客さんが2人でも3人でもいいからとにかく毎週歌ったら、大手のテイチクレコードという今人気独り占めしているレコードレーベルなんですけど、そこが目を付けてくれて、発売しましょうかといって、1月からスタートして9月に発売になって、めでたく金沢望郷歌がメジャーデビューということでいまやっていますが、その金沢望郷歌を作曲してくれたのが、弦哲也さんという作曲家なんです。で、弦哲也さん、多分これもご存知ないと思いますが、またじゃあタイトルだけ。ご存知ないですよ、演歌の作曲家です。

(音楽が流れる)

この人は音楽生活40年で、最初は歌手でデビューしたんですよ、それが全然売れなくて、北島三郎さんに「お前曲書いてしろ」とか言われて、曲を書いたらたまたまあたっちゃったんですね。その曲がおゆきってその将棋の棋士に書いた曲なんですけど、それが売れちゃって、おれは歌手でデビューしたのになんで曲が売れちゃうんだろ、とかたぶんいろいろと思ったと思うんです。で、じゃあ作曲家と歌手と両方でやっていこうという期間がちょっとありまして、やっぱり作曲の方が売れるんですよ。ほんとうは歌手になりたかったのに、作曲家になろうかなあと思って、そういう決断するために100回コンサートみたいなのをやって、コンサートは好評だったそうなんですけど、やっぱりきっぱり歌手をあきらめて、オレは作曲家でいこうって、その後いまは1000曲くらい書いているそうなんですけど、石川さゆりさんの「天城越え」とかですね、川中美幸さんの「ふたり酒」とか、結構有名な曲を書いている人です。いま演歌会の売れっ子ナンバーワンなんですけど、またこの人がなんで金沢のこんなローカル局でこんなのをやっているかという話なんですけど、この人の原点がやっぱり本当に売れない時代が10年や20年あって、そのころずっと歌手になりたいから流しの旅をやっていたんですね、ギター片手にちょっと一杯飲み屋とかおでん屋とかでちょっと弾いて、ちょっとお金を集めて、そして40年たって振り返れば成功だった音楽生活だけど、最初のその気持ちを忘れないように、ということでじゃあその一から、旅のスタートを石川県でやりましょうということで、これは金沢だけではなくて石川県いろいろ回りました。

で、これもすでに40回くらいやっているんですけど、ほんとにいろんな場所があって、ちょっとこれから見てもらうのは、ちょっとここにも書きましたが、奥能登の隠れた名物、能登キリシマツツジってのがありますね。ちょうどゴールデンウィークが終わったところに

能登を歩くと、季節はずれの紅葉みたいな感じですね、庭のあちらこちらのぼっと赤い木があるんですよ。それツツジなんですけど、それが能登キリシマツツジっていうツツジで、キリシマっていうくらいですから、九州原産なんですけど、昔その船かなんかで能登に渡ってきて、それを珍しがってみんな育てたっていう、そういうツツジです。この、樹齢300年の木を守りつづけている人の話。で、視聴ターゲットというのを番組作るときに必ず決めるんですが、50代60代の人をターゲットにして、最後に歌で締めくくるんですけど、その歌もちょっと古いんですけど、歌にこめたその人の気持ちを出そうという、そういう企画です。

(弦哲也の歌物語「300年の紅」の映像が流れる)

一週間だけ花を咲かせるんですよ、能登キリシマツツジは一週間だけ。別にこの夫婦は入場料としてこの花を見せるわけでもなんでもない。さっきちょっと出てきましたが、雪囲いってしますよね。雪囲いしたり、斜面に立ってるもんですから、そこに1本1本の枝にロープをかけたりするので、まず1ヶ月かかるんですって。であと雪が降ってくる日は、ツツジの上の照明をたいて、徹夜して見守ってですね、枝が折れそうなら揺らして雪をおろすんですって、なんのためにやるのかってのは、若輩者の私なんかには分からない、その気持ちが。言っていましたよね、お父さんがものすごいこのキリシマツツジが好きで、親父死んだら、このキリシマツツジ売っぱらって自分も海の方に行くってずっと思ってたんですって、で、実際お父さん亡くなって、で、本当に海沿いに土地を買ったんですって。さあ引越そうと思った春に、またキリシマツツジが赤い花をば一つと咲かせた。これを見てですね、かあちゃん止めよう、ここにまた暮らそうというようなことを言ったんですって。そういう話を聞いてて大泣きですよ。そんな歴史あるんだなあって。で、じゃあ300年続いたきたこの木を次誰がやるんだって、息子さんがいま警視庁だったかな、東京に住んでらっしゃって、別に帰る予定はないと。ほんとうにこの木どうなるんだろ、というふうに思っている、いまそういう状況なんですよ、「あゝ上野駅」っていう歌を歌ったんですけど、もともとたぶん「あゝ上野駅」ってのは、東京に志して出て行く若者たちの夢を歌った歌で、弦哲也さんもそういう歌だと思っていたんだけど、珠洲の人たちにとっては、上野駅ってのは自分の息子をとられる駅だったんですね。ちょっとここに書きましたが、東京から能登を見る、能登から東京を見ると書きましたが、その人その人によって物の見方とか立ち場とか、物に対する思いとか全然違って、そういうことをただ単純にインタビューしても出てくるもんじゃなくて、こういう歌を通してその人の人生を通して分かってくるんですよ。それが歌をテーマにした企画の面白いところで、そうやって聞くことで石川ってほんとにそういう風土があって個性があって豊かなんで、いろんな人生を持った人がいるんだなと感じました。

一番下におまけって書いてありますね、ガイドブック五木寛之の新金沢小景、書店にて好評発売中だそうです。じゃあこのPRで最後にして終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

どうもありがとうございました。蔵さん自身が製作した番組の映像を交えて、興味深いお話を沢山聞かせてくださいました。みなさん、今日の講演の中心テーマは分かりましたか？それは、一つの風景の中にも、色々な物語が隠れているということです。一つ復習してみましょう。今日のお話の中に金沢城のことが出てきました。今は整備された観光スポットとなっている金沢城ですが、あそこも実は沢山の歴史が織り込まれている場所なのです。まず10年少し前まではあの場所は何だったんでしょうか？そう、金沢大学があった場所ですね。金沢大学の学生は石川門を通過して、お城跡に作られた校舎に入っていたのです。では、そのさらに前は何だったんでしょうか？つまり、明治、大正、昭和の初め、あの場所は何だったんでしょうか？それは軍隊の駐屯地だったんですね。第九師団と呼ばれた軍隊の駐屯地でした。ではその前は？お城の本来の役割、つまり前田のお殿様の居住地です。その前はどのようなでしょう？千四百年代の終わり頃から千五百年代の終わり頃まで、そこは宗教と関係が深いところでした。浄土真宗の門徒たちが、今の金沢城のある場所に金沢御堂を作り、それを中心にして「百姓ノ持タル国」となっていたんですね。つまり今は観光地となっているあの金沢城跡は、時代を遡ると、学問、軍隊、殿様、宗教と、色々な層が積み重なっていることが分かります。

ところで今日の前半は就職ガイダンスだったんですが、マスコミは就職先として考えた場合、狭き門でなかなか入るのが難しいですね。どなたか、蔵さんがお勤めのテレビ金沢に入りたいと思っている人いますか？さっき蔵さんに、テレビ局は採用の際、人物のどのようなところに注目するのか、ちょっと聞いてみたんです。皆さんどのような点を注目すると思いますか？それは、物事を多角的に見る能力だそうです。一つのものを一面ではなくて色々な角度から見て、それをさらに演出できる能力が、テレビの仕事では重要だということです。一つの場所に色々な要素が折り込まれている金沢という街は、そういう意味で、格好の題材といえるかもしれません。作家の五木寛之さんが、金沢の街の色々な表情を見つけて紹介していく「新金沢小景」という番組がありましたが、そのテレビ金沢のシリーズ番組が本になって話題になっています。蔵さんもその番組スタッフであり、本になった「新金沢小景」のあとがきも書いておられます。今日のお話は、この本から数例とってきて紹介して下さったのですが、まだまだ他にも金沢の風景には面白い物語が隠されています。皆さんぜひこの本を手に入れ読んでみて、これまで知らなかった金沢の数々のエピソードに詳しくなっていきましょう。それではこれで本日の講演会を終了させていただきます。